

トビウオ通信 (R4 第4号)

<https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《令和4年度 第1回 日本海スルメイカ漁況予報》

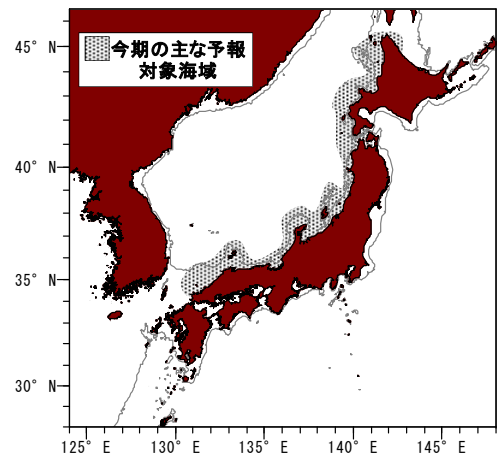
令和4年4月28日に国立研究開発法人 水産研究・教育機構（水産資源研究所）から「2022年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報^{※1}」が発表されました。今回はその概要と島根県沖でのこれまでのスルメイカ漁況を紹介します。

今後の見通し（令和4年5月～7月）のポイント

対象魚種：スルメイカ
対象海域：日本海沿岸域
対象漁業：主にいか釣り漁業
対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：前年を上回り、近年平均並み
- (2) 漁期・漁場：主な漁場は本州北部日本海以北で、漁期は近年同様

* 近年は最近5年間(平成29年～令和3年)



(1) 来遊量

令和3年10月～11月に実施されたスルメイカ稚仔調査では、スルメイカ幼生（主に外套背長^{がいとうはいちよう}1mm～3mm）の分布量は、令和2年を下回り、過去5年（平成28年～令和2年）平均を上回る状況でした。令和4年4月に実施されたスルメイカ新規加入量調査では、今期に漁獲が期待されるサイズ（外套背長5cm以上）のスルメイカの分布量は、前年（令和3年）および近年（平成29年～令和3年）平均を上回る状況でした。一方、令和元年以降、日本海沿岸域への来遊は不安定であることが多く、令和4年4月に実施されたスルメイカ漁期前分布調査でも北上するスルメイカの群れが確認されていないことから、近年平均を上回るほどではないと考えられています。以上から今期（5月～7月）の来遊量は「前年を上回り、近年平均並み」と予測されています。

(2) 漁期・漁場

スルメイカの漁場形成に影響を与える今後（4月中旬～6月）の対馬暖流域における表面水温は平年よりも「やや高め」（平年は過去30年（昭和61年～平成27年）の平均値）、50m深水温は「平年並み」で経過すると予測されています（2022年度第1回日本海海況予報^{※2}、国立研究開発法人水産研究・教育機構、令和4年4月8日公表）。令和元年以降の日本海沿岸では同様の傾向が続いていることから、主な漁場は「**本州北部日本海以北（石川県以北）**」、漁期は「**近年同様**」と予測されています。

※1、2は以下の水産研究・教育機構のホームページからご覧いただけます。

※1：https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2022/20220428_srm/20220428press_srm.pdf

※2：<https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2022/20220408/20220408press.pdf>

島根県沖でのスルメイカ漁況

主要3港（浜田、西郷、恵曇）^{※3}における小型イカ釣（5トン以上30トン未満）によるスルメイカの月別の水揚動向を図1に示しました。令和4年の1月～3月までの水揚量は39トンで、前年（73トン）および近年（平成29年～令和3年）平均（59トン）を下回る漁況で経過しています（前年比54%、近年平均比67%）。

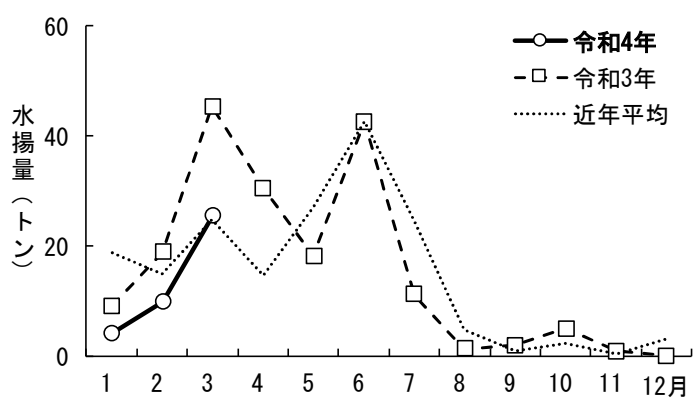


図1 主要3港におけるスルメイカの水揚動向

これは、近年の海水温などの海洋環境の変化により、スルメイカの産卵に適した海域が縮小する傾向が見受けられ、新規の加入量が少なくなったことが主な要因と考えられます。そのため、スルメイカ全体の資源量が減少し、島根県沖への来遊量も減少したと考えられます。ただし、スルメイカは1年魚であるため、スルメイカに適した環境条件が揃えば資源が回復する可能性もあり、今後の動向を注視していく必要があります。

※3：浜田は属地データ、西郷および恵曇は属人データを集計。